

おのきた

尾北校長室から

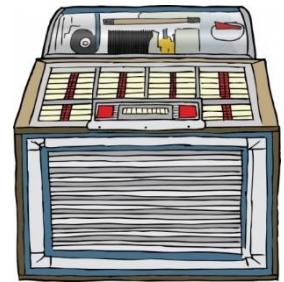
第30号



槇峰祭に思う～ 40年後まで記憶に残るものに

3年前の夏に何をしたか、すぐには思い出せない。しかし、40年以上も前の高校時代のある夏は、何をしたかすぐに思い出せる。1975年、創立50周年の節目の年、高校2年の夏は、レコードを集めまくった。その年の槇峰祭のテーマは「歴史の創造」で、何でもよいから50年の歴史を調べる、というのが全クラス共通の出し物だった。我が2年1組は、歌謡曲からフォークソングに移る「歌の50年史」の年表作成と、来た人にリクエストしてもらい、その曲をかけるという「ジューク・ボックス」の出し物に取組んだ。

皆さんには「ジューク・ボックス」という言葉は死語に近いだらうから、また私の表現力ではさらに理解が遠のきそうなので、広辞苑にある「ジューク・ボックス」の説明を次に借りてみたい——「硬貨を入れ、前面に記された好みの曲目のボタンを押すと、自動的にその曲のレコードがかかる演奏装置」——文化祭に向け、ジューク・ボックスに模した、人が二人ほど入る段ボール箱を作り、あちこちから借りたレコードを300枚程、カセットテープも一杯用意して臨んだ。そして当日、狭い箱の中でリクエストを待ち続け、投げられたリクエスト紙片に基づきレコードやカセットをかけ続けた。少ない小遣いを貯めて私自身が初めて買った記念すべきレコード（岩崎宏美のデビュー盤）は、残念ながら一度も流れることはなかった。



創立50周年記念槇峰祭(1975年)



この1975年の槇峰祭に先立つ思い出は、その後、幾度となく経験することになる、どの夏休みにもまして、40年以上たった今でも鮮やかに目に浮かべることができる。クラスの仲間と一緒に何かをなし遂げた、楽しく充実した時間となっている。勉強はしんどかったが、学校は実に楽しかった。

皆さんが高校時代を振り返る時、コロナのことしか思い出せないようなことにはならないようにしてほしいと思う。令和3年、2021年の6月、自分はどのようなことを考え、どのように過ごしたか、明確な意思をもってコロナ禍の第35回槇峰祭、何かにチャレンジする良い機会としてもらいたい。

高校時代というのは、「青春」と呼んで彩られる、美しいものばかりではなく、むしろ、子供のロマンティシズムの時期が終わり、現実の世界に否応なく押し出され、リアリズムの世界に入っていく時期である。人として鍛えられる、どちらかという、しんどい時期だと思う。皆さんには、自分で自分を鍛え育てる3年間を過ごしてほしいと思う。楽なことばかりの時間では「心」は育ちようがないと思うのである。

そうはいっても今年の槇峰祭、いろいろと制約のある文化祭となってしまう、済まなく思う。コロナ禍という特別な状況であるが、小さくも、短くとも、皆さんが40年以上たってもなお、その時の景色や友とのやり取りが鮮やかに思い出せる、そういう時間にしてもらいたい。皆さんが書き記す第35回槇峰祭、本校の歴史と皆さんの心に深く刻まれるものとなるよう願ってやまない。